

平成 23 年 2 月 28 日

助成研究の中間報告

助成番号 第 252-6 号	助成研究名	研究者名・所属
中間報告の期間	助成決定から <u>実地予備調査及び知能的改善法の検討</u> までの研究	
<p>本研究の目的は、駅構内等の公共空間におけるサインの見え方を実地調査し、それらの画像データを分析することで現状のバリアフリー度を定量的に検証するとともに、照明環境も含めた見えのシミュレーションを行い、知能的なサインデザインの改善案を生成するシステムを開発し、被験者実験で検証しながら、公共空間の設計現場で使えるバリアフリー設計支援ツールを実現することにある。</p> <p>初年度 (H22 年度) は、最初にモバイル型画像蓄積装置を開発した。フル HD 動画撮影機能搭載を有するデジタルカメラにモバイル PC を組み合わせ、取得した色情報を忠実に伝送・処理するソフトウェアを作成した。次に、評価視環境データを正確に取得・蓄積し、高齢者や色覚異常者の実際の見え方を忠実にシミュレートするために精確な色再現を実現するキャリブレーション(校正)手法を、色彩工学を駆使することで確立し、カラーマネージメント液晶モニタを導入することで、モバイル型画像蓄積装置で取得した画像情報を使って実空間の正確な色再現表現が可能となった。この技術は、当研究のみならず、色彩に関連する様々な研究・用途に応用可能である。</p> <p>その後、共同研究者と分担し、本システムを用いて関東および関西の実際の駅構内等の公共空間におけるサインの見え方を実地調査する準備を進め、その予備調査を行なった。本調査(動画取得)については、駅ビルや鉄道会社の承諾を得るためには事前に詳細な調整が必要であることが判明し、それに予想以上の時間を要していることに加え、今年度末は大学の予算が凍結されており調査費用が使用できないこと、また撮影の補助を依頼する予定だった学生が就職活動のため調査に参加できないこと等の理由により、実地調査は H23 年 4 月から開始する予定である。そのため、当初は H23 年 6 月以降に開始する予定であった「サインの改善案の知能的生成」を今年度から前倒しで開始するとともに、この 3 月から開始する「調査結果と画像データの整理解析」を動画取得(実地調査)と並行的に進める予定のため、研究計画全体としては問題はなく、2 年間で当初の目的を達成できる見込みである。</p>		

